

# 勲章を貰う話

菊池寛

青空文庫



春が来た。欧州戦争第二年目の春が来た。すべてのものを破壊し、多くの人類を殺傷している戦争も、春が蘇<sup>よみがえ</sup>ってくるのだけは、どうすることもできなかつた。

戦争の荒し壊す力よりも、もつと大きい力が、砲弾に碎<sup>くだ</sup>かれた塹壕<sup>ざんごう</sup>の、ベトンとベトンの割れ目から緑の芳草<sup>ほうそう</sup>となつて萌え始めた。砲弾に頂<sup>いただき</sup>を削り去られた樺<sup>かば</sup>の木にも、下枝<sup>しずえ</sup>いっぱい瑞<sup>み</sup>ずみず々しい若芽が、芽ぐんできた。

冬の間、塹壕の戦士たちの退屈な心を腐らせた陰鬱な空の色が、

日に日に快活な薄緑の色に変わっていった。

戦線に近いプルコウにある野戦病院の患者たちも、銘々蘇よみがえつてきた春を、心のうちから貪り味わった。彼らが戦場における陰惨な苦しい過去を考えると、ガラス窓を通して、病室のうちに漂っている平和な春の光が、何物よりも貴く思われるのであった。

ワルシヤワから、コヴノ要塞にかけての戦場で、有名を轟とどろかした士官候補生イワノウイツチの負傷も、もうまったく癒いえていた。

彼は、露暦三月十三日の朝、いつよりも早く目をさました。のどかな春の朝であった。病院の廊下に吊るされた籠の中の駒鳥は、朝早くから鳴きしきって、負傷兵たちの夢を破っていた。イワノウイツチは、寝台の上に起き直ると、両手を思い切り広げて大き

い伸びをしようとした。が、右の手だけは彼の神経の命ずる通りに動いたが、左の方には、彼の神経中枢の命令を奉ずる何物も残っていないかった。彼は苦笑した。彼にはまだ、左の手が存在するような感覚だけが残っていた。そして、その感覚のために度々<sup>あざむ</sup>欺かれた。が、この朝だけは、自分が不具になったという悔恨は、少しも残っていないかった。

彼は二、三日前、総司令部からこの日ニコライ太公が、戦線からの帰途この病院を訪うて、サン・ジョルジエ十字勲章を彼に与えるという通知を受けていた。その勲章には三百ルーブルの年金が付いていた。彼はこの名誉と年金とをもって、元の大学生生活にかえろうと思っていた。そして静かな、<sup>わずら</sup>煩わされない生活を楽

しもうと思つていた。

サン・ジヨルジェ十字勲章に、彼は十分に相当していた。「勇士イワノウイツチの五つの英雄的行動」といったような話は、戦場美談として、広く流布るふされていた。この病院に来る特志看護婦や、いろいろな団体の慰問使は、有名な勇士イワノウイツチに握手を求めることを忘れなかつた。

イワノウイツチは、今朝、なんのわだかまりもない晴々とした心持であつた。彼は、廊下に吊るされた籠の中の、駒鳥の快い鳴き声を寝台の上で聞きながら、太公が彼に勲章をくれる晴れがましい情景シーンを想像してみた。

イワノウイツチは、まったく得意であつた。彼はのびやかな心

持で寝台から下りると、真新しい軍服に着替えた。彼は久し振りに軍服を着たのであった。左の腕がないために、服の袖がだらりとしているのが淋しかった。が、それは、彼ののうのうとした心持を曇らすには足りなかった。彼は、病院の廊下を、大股でゆつくりと歩き始めた。ガラス戸越しに見える芝生には、朝の陽光がいったいに溢れていた。彼はこの時、ふと自分の所属連隊の副官のダシコフが、自分に勲章をくれるといい出したことを思い出した。が、本当は、ダシコフがくれたのではない、彼が自分の勲功で堂々と貰うのである。が、イワノウイツチは、心のうちで「俺に勲章をくれたのは、やはり副官のダシコフだ」と思った。どうしてダシコフが、彼に勲章を与えたか。それにはこんな話がある。

## 二

大学生から、従軍を志願して、士官候補生に採用されたイワノウイツチが、ワルシヤワに到着したのは一九一五年の夏の初めであつた。

もう、その頃は、ワルシヤワを去る五十マイルぐらいのところ  
で、露独の重砲が、すさまじい格闘を続けていた。ワルシヤワの  
街の大きい建物のガラス窓が、砲弾の響きで気味悪く震えること  
などがよくあつた。

が、ワルシヤワの市街は、どんなであつたらう！ イワノウイ

ツチは、最初ワルシヤワを、煤煙と埃ほこりと軍隊との街だと思つていた。ところが、停車場から市中へ足を踏み入れると、華やかな初夏の情景シーンを備えた街々が、一步一步眼前に展開されていくのであった。軽やかな夏の新装を身に着けた貴婦人たちの群が、ウヤズドフスキエの大通りを、いくつも流れていった。彼らは皆鮮やかな色彩のパラソルをかざしていたので、強い太陽の光を浴びた街は、万華鏡を覗いたような絢爛けんらんな光景を呈していたのであった。戦争はどこにあるだろうと、イワノウイツチは思った。街路樹の陰の野天のカフェーにも、客がいつぱいに溢れて、アイスコーヒーなどを飲んでいた。

イワノウイツチをおどろかしたことは、まだたくさんあった。

すべての劇場も活動写真キネマも、興行を続けていた。ことに喜歌劇をやる小劇場には士官や兵卒が群集して、若い歌手の女たちに喝采を浴せていたのであった。

ただ唯一の戦争の印としては、ポーランド王スタニスワフの古王宮たるヴィヌラフ宮殿の上に、一旒りゆうの赤十字旗が、初夏の風にひるがえ翻つているばかりであった。

イワノウイツチは、いよいよ出征と決まった時、心のうちで、すべての歡樂に別れを告げていた。その上、愛国的の興奮から従軍を志願しただけあつて、最初は独軍の砲声を聞きながら、くだらない歌劇などに現うつを抜かしている士官や兵卒に、かなり大きい反感を持たずにはいられなかった。が、イワノウイツチは、若い

青年であつた。ことに彼の血には歡樂に脆いもろ南ロシア人の血が流れてゐた。

イワノウイツチが編入された、ワルシヤワの守備の連隊が駐屯してゐたワジエンキ王宮の近所には、パガテラという有名な遊園地があつた。そこには、喜歌劇や活動の小屋が、いくつもいくつも並んでゐた。連隊の士官たちは、每晚九時頃から、昼間の練兵の疲れをまつたく忘れたかのように、銘々、緑色の新しい軍服に着替えて、髭ひげをていねいに手入れして、小劇場の棧敷さじきに顔を並べてゐた。彼らは銘々花束や花輪を用意して、氣に入つた歌手の女に贈るのであつた。イワノウイツチも、こうした歡樂にすぐ馴れてしまつた。

イワノウイツチの注意を最初にひいた女は、リザベッタ・キリローナという歌手であった。彼女は一座のスターではなかった。が、その娘らしい表情と潤いうるおのある肉声とは、容易にイワノウイツチの心に食い入ってしまった。彼女の丸い顔立とやや黄味のかかった瞳とは、彼女のポーランド人であることを明らかに説明していた。彼女は、日陰に咲く淋しい草花のように、自分の周囲に淋しい陰影を持っていた。やや感傷的なイワノウイツチは、彼女のこうした淋しさにかえって心をひかれるのであった。

彼は、毎夜必ずリザベッタの出演する白鳥座の栈敷に、身を置いた。そして、彼女があまり目立たぬ役を演じ終ると、決まって花束を贈ったのであった。

イワノウイツチがその女を獲るのは、ほんの僅かな労力であつた。二十日も経たぬ頃には、彼は彼女と一緒に、ワルシヤワの街の夜ふけに、馬車を走らせている自分を見出したのである。が、イワノウイツチは、自分の恋に恐ろしい競争者のあることにすぐ気がついたのである。幕が降りてから、歌手たちが銘々贈られた花束を手にして再び舞台に現れる時、リザベツタは、必ず二つの花束を持っていた。一つはイワノウイツチが贈つたものであつたが、他の一つは何なんびと人によつて贈られたのか分からなかつた。人氣の立たない、淋しいリザベツタは、二つ以上の花束を持つてゐることは、はなはだ希であつたが、二つを欠いたことはなかつた。イワノウイツチは、花束の代りに上等な花輪を贈つてみた。する

と、リザベツタはまた二つの花輪を持って舞台に現れた。イワノウイツチが大きい花籠を贈ると、隠れた敵手ライバルは、またすぐ大きい花籠をリザベツタに贈って、その挑戦に応ずるのであった。

イワノウイツチは、相手の名をリザベツタにきくと、彼女は微笑をもらしながら、なんとも答えなかつた。

が、間もなく、イワノウイツチの敵手ライバルを探る瞳に映じたのは、いつもこの小屋でよく顔を合わす同じ連隊の一等大尉のダシコフの姿であつた。ダシコフは連隊副官を務めている大きい図体の男であつた。この男は毎晩必ず一人で、棧敷に姿を見せていた。そしてきつと、花束を一つだけは用意しているのであつた。

イワノウイツチは、本能的にこの男を、自分の競争者だと感じ

ていた。イワノウイツチの感じは、彼をまつたく欺あざむかなかつた。ある晩、彼は馬車を雇つて、リザベツタが楽屋から出るのを迎えていた。

彼は、華やかな恋の欣よろこびを感じながら、小柄なりザベツタを抱えるようにして、馬車に乗せて馭ぎよ者に合あ図の手振りをした。その時であつた。彼は楽屋口の閉場時はの、混乱わづした群衆の中に、連隊副官のダシコフ大尉の蒼白な頬と、燃ゆるような二つの瞳とを見出したのである。イワノウイツチは怖ろしいものを見たように、顔を背そむけた。そして馭者に命じて、速力を増さしめた。

その次の朝、イワノウイツチは、ワジエンキ宮殿の広場で、不意にダシコフ大尉と会つた。彼は妙な圧迫を感じて足を止めて拳

手の礼をした。するとダシコフは、悪意のある微笑を湛えながら、  
近寄つてイワノウイツチの肩を軽く叩きながら、

「君は第一大隊の士官候補生ユンケルだったね。わしは連隊副官のダシコフだ。いいか！ 連隊副官のダシコフだよ」といいながら、さらに皮肉な笑い方をした。

イワノウイツチは、この男が恋の相手たる自分を、階級の力をもつて圧迫しようとする悪意を、ありありと感じたのである。彼は反抗の心が、胸に溢れるのを感じた。するとダシコフは再びイワノウイツチの肩を叩きながら、

「またゆつくり会おう。白鳥座以外のところでね」といいながら、脅威的な悪意のある笑みを残して去った。

## 三

七月が、だんだん終りに近づいた。ワルシャワの市街を照す日光は、日に日に熱度を加えてきた。それと同時にワルシャワを半円に取り巻いている独軍の戦線が、時々刻々縮まっていた。

イワノウイツチには、毎晩夜の来るのが待たれる。昼間は、営舎の内部がひどい熱気に蒸されて、大きいストーブのようになっていた。そして、ワルシャワ名物の蠅が、天井にも、床にも、壁にも、いっぱいに止まって、それが不斷に動いて、壁や天井そのものまでが動いているように見えた。

が、夜になるとワジエンキ宮殿の泉水には冷たい微風が吹き起つた。月の光が、ワルシヤワの街を青い潮水の水底にあるように思わせた。その中を霧が煙のように絶えず上つて、霧の晴間には、月の光にぬれた樹木の青葉が、きらきらと輝いているのが見えた。そんな宵、彼は必ずリザベツタの家を訪うた。

彼女は、バガテラからあまり遠くない、ブラウスキ街十二番地にある家に住んでいた。彼女は大きい建物の三階にある部屋を三つばかり占めていて、ローナという年寄の婦人と慎ましく住んでいた。彼女は劇場に出る前の短い時間を、よろこ欣んでイワノウイツチをもてなした。

彼はリザベツタの室にいる時、折々老婆がダシコフの来たこと

を告げに来ることがあつた。が、そんな時リザベツタは、ちよつとイワノウイツチに気兼ねをしなから、

「病氣だといつておくれ」と断つた。そうした後などは、イワノウイツチは、ことさらに自分の勝利者たる境遇を、勝ち誇るような気持がした。

そうこうするうちに、七月は進んだ。ワルシヤワの左翼を擁護しているルブリンの要塞が危険だという報道が伝わつた。さすがに、その頃からワルシヤワの街には、負傷兵がみち溢れた。負傷兵を載せた無蓋の馬車が、ワルシヤワの大通りに続いていた。その中でも、毒ガスにやられた病兵がことに多かつた。彼らは紫がかつた顔色をして、頻<sup>しき</sup>りに咳をした。

ドイツのタウベ飛行機が、夏の空高く、黒い十字を描いた翼をきしらめか閃しながら、ワルシヤワの街の上を飛び回ることがあった。が、ワルシヤワの貴婦人たちはパラソルをかし傾げながら、また平然と空を仰ぎ見た。夜は芝居も活動写真キネマも、あいかわらず興行を続けていた。むろんイワノウイツチとリザベツタの会合も続いていたのであった。

ところが七月の終りに近づいた頃、イワノウイツチはある日、連隊副官のダシコフから呼びつけられたのである。

彼は、その後もダシコフ大尉と二、三度会ったことがある。そのたびに、この一等大尉は妙な苦笑いを頬に浮べているのを常とした。

この日、ダシコフ大尉はイワノウイツチの顔を見ると、いつものようにちよつと苦笑いをしたが、彼はすぐ椅子に反り返りながら、

「士官候補生ユンケルイワノウイツチ！」と命令口調をもつて、いい放つた。「お前は、ブラウスキ街の十二番地を知っているだろう。いか、わしは今、上官として、お前に命令を発するのだ」

イワノウイツチは、こう聞いた時、挑戦の手袋を投げつけられたように、きつとなった。

ブラウスキ街の十二番地というのは、彼の新しい情人であるリザベッタの住んでいる建物の所在地に相違なかった。

「わしはお前の上官だよ。いいかイワノウイツチ！ わしのいう

ことは命令だよ。いいか！ 注意をしてききなさい。お前は、今後ブラウスキ街十二番地に足踏みをしてはいけないんだ。いいか、あそこにある、木造の階段を昇ってはならないんだよ。いいか分かったか」

この命令をきいていたイワノウイツチの顔は、充血したと思う間もなく直ちに蒼白になってしまった。そして彼の唇が痙攣けいれん的に震え始めた。

が、ダシコフ大尉はこういつてしまうと、今までのことがまるきり冗談であったかのように、笑い出してしまった。彼は急に言葉をやを和らげて、

「が、わしは、只では命令はしないよ。この命令には、ちゃんと

賞罰が付いているのだ。イワノウイツチ君、お前はサン・ジヨル  
ジエ十字勲章を欲しくはないか。年金の付いたやつだよ。一年に  
三百ルーブルの年金の付いたやつだよ。わしはこの連隊の副官だ。  
いいか、勲章の申請は、わしの思う通りになるのだ。どうだいワ  
ノウイツチ君！ 安っぽい歌劇の歌手よりも、十字勲章の方を選  
んだらどんなものだ」こういういながら、ダシコフは、ふたたび哄  
笑したのである。

が、若いイワノウイツチには、恐ろしい激動があつたばかりで  
ある。彼には、まだ正義の心が、何物にも紛<sup>まぎ</sup>らされないほど、明  
らかに残っていた。ことに、彼から情人リザベツタを、権力と手  
段とで奪つて行こうとするダシコフの態度に対する憎悪が、  
旺<sup>おうぜ</sup>

然と湧いてくるのを制することができなかつた。

「どうだ、イワノウイツチ君！」

ダシコフは、返事を催促した。イワノウイツチは自分の激怒を放つべき機会を得たように思った。右の手が劍けんはを探ろうとする動き方をするのを、ようやく制しながら、

「豚ぶため」と吐きつけるようにいうと、そのままドアを力まかせに開いて、外へ出た。ダシコフは彼の後姿を見ながら、

「それじゃ罰の方が欲しいのだな」と後から、捨台詞すてぜりふを投げた。

#### 四

ルブリンが陥ちたという報道が来た。ドイツの飛行機タウベが、ワルシヤワの上空を見舞う日が多くなつた。そのうちの一機が、夏の日には、輝いて流れるヴィスワ川の上空から、ワルシヤワの街の上を低く飛翔しながら多数の紙片を撒いた。その紙片には、「木曜日にワルシヤワ陥つべし」と書いてあつた。何週の木曜日だか、正確な時日はわからなかつたが、それが、ワルシヤワの市街を、ほのかに運命づけたようにみえた。ワルシヤワの市民は、この紙片を見て笑つた。が、それは、嘲笑でもなければ、苦笑でもない、一種妙な、皮肉な笑い方であつた。

ポーランド人が多いワルシヤワの市民は、戦いについて、こんなことをいつていた。

「露兵が独兵を、遠く駆逐してくれればいい。そして彼らがワルシヤワから、遠く離れてくれればいい」この彼らのうちは、独兵も露兵も、一緒に含まれていたのである。

亡国の氏として、露国の主権に服従していた人々には、今度、独軍がワルシヤワを占領するということは、借家人が、いつの間にか、自分の家が売物に出ているのを知ると、あまり変ったおどろきではなかった。

彼らは、タウベが飛んでいる空の下で、平気でアイスコーヒーやソーダ水を飲んでいたのである。

ワルシヤワの衛戍隊えいじゆたいであつたイワノウイツチの連隊も、戦場へ送られる日を待っていた。彼などはもう三十マイルと離れてい

ない戦場で、敵、味方の照明弾が打ち上げられるのが明らかに見え  
えた。

イワノウイツチには、急にいろいろな任務が割り当てられ出した。それが妙に夕暮から、夜にかけての仕事が多かった。

ダシコフの命令を、イワノウイツチは無意識に守っている形であつた。リザベツタに会わずに四、五日が過ぎてしまった。

八月の三日であつた。連隊にとうとう出動命令が下つた。翌四日をもつて、ワルシヤワを撤退し、野戦軍と合すべく、ジラルドウフ停車場方面の戦線へ進出せよというのであつた。

イワノウイツチは、初めて、砲火の洗礼を受くべく、戦いの大渦巻の世に入らねばならなかつた。

彼は、さすがにリザベツタのことが、忘れられなかった。戦場へ出ることは、ある程度まで死を意味していたのだから、彼は、リザベツタに最後の名残を告げようと思っていた。撤退の準備として、ワルシヤワの工場は、もうたいてい火を掛けられていた。

それと独機の爆弾のために起っている火事とで、ワルシヤワの街は煌々こうこうと明るかった。イワノウイツチは、中隊長の目を盗んで、秘ひそかにワジェンキの営舎を抜け出たのである。

道では、折々避難者の馬車に会った。彼らは家財や道具を崩れ落ちるほど馬車に積んで、停車場の方角へ急いでいた。

が、その晩もワルシヤワの市民の大部分は、まだ落着いていた。芝居も活動小屋も興行を続けていた。今ワルシヤワを占領してい

る者も、彼らには他人であつた。二、三日後にワルシヤワを占領する者も、また彼らには他人であつた。

その夜、リザベツタは、市街の混乱と騒擾そうじょうとを恐れて出演してはいなかつた。彼女は極度に興奮していた。夏の夜に適ふさわしい薄青い服を着て、ソファに倚よりながら、不安な動揺にみちた瞳を輝かしながら市街に起る雑多な物音に脅えていた。

彼女は、イワノウイツチがドアを開けると、すぐ駆け寄りながら、

「ワルシヤワは陥ちるのでしょうか」と深い憂慮に震えながら尋ねた。

「もちろんですとも」と、イワノウイツチは自分ながら、落着き

過ぎると思うほど、落着いて答えた。そして、

「これが我々の最後の晩です」と付け加えた。が、リザベツタは淋しい微笑をもらしたばかりで、すぐ滅入ってしまった。

「あなたは、どこかへ逃げないのか？ モスクワか、ペトログラードかへ」と、イワノウイツチが彼女に対して、深い愛情を表しながらきいた。

「モスクワ！ ペトログラード！ 私の故郷は、ワルシャワのほかに、どこにもない」と答えると、彼女は急に深い感傷的な興奮にとらわれながら、イワノウイツチの胸に、彼女の頭を埋めようとした。

その時である。この部屋のドアを、表から軽くノックする音が

きこえた。彼女は、気軽に、

「ローナかい」と呼びかけた。彼女の召使いの老婆は、その日の夕方から、外出していたのであった。

「いや、ダシコフだよ」と、こう声がするかと思うと、鍵の掛つていなかったドアは、激しく押されて、驚愕したイワノウイツチとリザベツタとの眼前に、大尉ダシコフは、その長大な体軀を現したのである。それを見たりザベツタは、軽い叫声を挙げながらよろよろと後退りして、ソファの上に倒れてしまったのである。

イワノウイツチとダシコフの二人は、そこに永久に融和しがたき敵として、睨み合いながら突つ立ったのである。

「イワノウイツチ！ わしは、今何もいわない。ただ、命令する

！ お前の兵營に帰れ！ お前の義務が、それを要求するのだ、  
 帰れ！」とダシコフは、唇を震わしながら怒鳴った。

イワノウイツチの顔も、憤怒ではち切れそうに見えた。彼の顔  
 は、みるみる蒼<sup>まつさお</sup>白に転じかけた、が彼の心のうちに、最後の一  
 夜だけ、女を競争者から確保しようという要求が、烈々として火  
 のように燃え始めた。彼は、劍<sup>けん</sup>を砕<sup>くだ</sup>けよと、握りしめながら、  
 「あなたの義務も、やはりそれを、要求するのだ、お帰りなさい」

「お前こそ」

「あなたこそ」

そこには、もう階級が存在しなかった。ただリザベツタとの、  
 戦場に出ずる前の最後の——文字通りに最後の会合を、自分が独

占しようとする デスベレート 必 死な競争の敵対関係のみが、存在していた。

ダシコフは自分の腕力を信じていたらしかった。彼は突然、イワノウイツチに躍りかかりながら、その首筋を掴んで、ドアの方へ引きずって行こうとした。怖ろしい格闘が起った。力において劣ったイワノウイツチは、敵のために、力いっぱい首筋を絞めつけられながら、ドアにぐいぐいと押さえつけられた。ダシコフは、もう自分の完全な勝利を信じていた。

「どうだ！ わしは自分の命令を、完全に遂行する力を持っているのだ。本当の力を持っているのだ」彼はやや息を切らしながら、こう叫んだ。そして完全にイワノウイツチを室外に放逐するため、最後の努力をしようとしていた。その瞬間である、偶然自由

を得たイワノウイツチの右の手は、自分の腰に吊した拳銃の革袋を探っていたのである。

ちようどダシコフが、イワノウイツチを室外に引きずり出した時、奇妙に押し潰されたような拳銃の音が響いたかと思うと、大きいダシコフの身体がよろよろと室内に転げ込んだまま、激しい音をさせながら、そこに、へたばってしまった。そしてすぐそれを追うように、これもよろよろとしたイワノウイツチの蒼まっさお白な顔が現れた。イワノウイツチは、しばらくは、ダシコフのびくびくする四肢を、見つめながら茫然と立っていた。ダシコフの上着についた血のにじみが、みるみるうちに大きく広がっていく、蒼白に変わっていく大尉の顔を見ていると、深い悔恨が、だんだんイ

ワノウイツチの心を蝕むしばんでいった。

イワノウイツチは、悔恨のほかには何物もないような気持になって、軽い戦慄を覚え始めたのである。

ふと気がつくと、リザベツタは、先刻から興奮に痛められた神経が、最後の銃声によって止めを刺されたと見え、卒倒したまま蒼白な顔を電気の光に晒さらしているのであった。

イワノウイツチの心には、悔恨の根がいよいよ深く入っていった。彼は善良な学生であり、愛国的の熱情を湧かしていた自分の近い過去が思い出された。しかもその自分が、戦争に行く前夜に、上級の将校を殺したということが、彼には、もう恐ろしい罪悪として、心のうちにひしひしと感ぜられ始めてきた。

彼は、やや震えている自分の右の手にしつかりと拳銃を掴み直して、自分の咽喉へ擬したのである。

が、考えてみると、ここで命を捨てるのは、かなりにはからしいことであつた。もう独軍の重砲弾が、盛んにワルシヤワの外がいか郭くを見舞っている。自分は、夜が明ければ、この塵殺おうさつてき的な砲弾の洗礼を受くべく戦場へ向うのである。拳銃よりも、敵の巨砲の方が自殺の凶器としてはどれだけたのもしいものかも知れない。しかも、自分で自分を殺す代りに、独軍の砲弾なり銃剣なりで死ぬることは、ただ、自殺という見方からいっても、形式を少しく変えるというに過ぎなかつた。

彼はこう思うと、そこに自分の進むべき闊然たる大道が開けて

いるように思われた。彼は心を取り直した。戦いなるかな、自分の罪を償うためにも、最後の愛国的な興奮に副そうためにも、ただ戦いがあるばかりだと思った。

彼は、そう決心すると、ソファに倒れているリザベツタのそばに近づいて、その冷たい額に軽い名残りの接吻キッスを与えた。彼女は、今明らかにダシコフ大尉のものではなかった。得々とした、勝利の感情をもつて、死体と同様なリザベツタを見つめながら立っていると、妙な、悪魔的な心が彼の胸に湧いてきた。いかにも、リザベツタはダシコフ大尉のものではなかったが、果して彼女は、自分のものであろうか。ダシコフが、リザベツタと引き離されて、強制的に死の世界に送り込まれたように、自分も強制的に戦場へ

送り込まれようとしているのだ。ダシコフの死骸が、リザベツタの所有者ではないように、彼も、彼女の所有者ではなかった。彼らが去れば、すぐ独軍の将校たちがワルシヤワの歌妓たちの歓待を受けるのだ。お前は、独軍の将校たちの手のうちにお前の女を今手渡ししようとしているのだ、お前がここを去ったら、もうお前は再び帰ることはない。彼女を、お前はそのまま残して置くつもりなのか。お前はダシコフから完全に防御した獲物を、どうして確保しないのか。お前のものにする方法を知らないのか。それは彼女も、ついでにここで殺してしまふのだ。否、殺すのではない、あの女の卒倒している状態を、ただこのままに続けさせておけばいいのだ。ただ彼女を永久に覚めさせなければいいのだ。お

前は、もうすぐ死ぬのではないか。その前に殺した人の数が単数であるか複数であるか、それがいかなる相違をなすのだ。リザベツタを完全にお前のものにしてしまえ！ それはリザベツタの卒倒の状態をただいつまでも続けておきさえすればよいのだ。すべてが混乱だ。誰が殺したか、誰が殺されたか、分かるものか。今この街の外郭では、人間が幾万となく殺されかけているのだ。

お前は、自分の可愛い女を、お前の後に残して置くのか。この女は、お前に許したように、ダシコフにも許していたのだ。誰にでもすぐ自分を許す女は、ワルシヤワへ入る最初の独軍の将校の持物になるだろう。この女は、独軍がワルシヤワを占領しても、やはりアルトを歌っているのだ。そして、多くの独軍の将校が、

お前が投げたように花輪を投げるのだ。この女を完全にお前のも  
のにするのは、ただこの卒倒した状態をそのままにしておくのだ。  
この女を再び意識の世界へ帰さなければいいのだ。ただそれだけ  
だ。

彼の頭は嵐のように混乱した。彼は再び拳銃を持ち直し、リザ  
ベッタのそばへ寄ったのである。

## 五

彼がおもて戸外へ出ると、外はもう宵よりも混乱の度を加えていた。  
そのうえ時々、タウベが落す爆弾の炸裂する声が、激しいそうじよ騒

擾<sup>う</sup>に更に恐怖と不安とを加えた。

大きい建物が、市街のあつちこつちで盛んに燃えていた。その炎で赤くただれた空に、細かい尖塔や円いドームが隠見した。

彼は、再び、深い悔恨に浸っていた。どうしても、この世に身の置き所のないような、深い深い悔恨に浸っていた。

×

八月五日の夜に、ワルシヤワは陥ちた。イワノウイツチの属していた第五十五師団の第二連隊も、ワルシヤワを撤退して、ヴェスワ川の右岸の戦線に就いたのであった。

大きい混乱であつた。第二連隊では、副官のダシコフが行方不明になったことは誰の深い注意にも値しなかつた。連隊長が、ち

よつと首を傾げたまま、すぐ後任を任命したのである。

イワノウイツチは、隊伍のうちに加わりながら、大きい良心のかしやく呵責を担っていた。彼は、勇敢に戦い、自分の生命をできるだけ高価に売ることを考えた。

彼の顔は、その頃からやや蒼白な色を帯び、狂犬のような瞳をしていた。戦友はそれを臆病だと解しようとしたが、彼は、それに抗議を申し込むでもなかった。が、戦友の誤解はすぐ解かれた。彼の勇敢な戦いぶりは、僚友の目をおどろかしたのである。戦うことによつてすべてを忘れ、すべてを償おうと彼は思ったのである。

ワルシヤワからコヴノに退却するまでに起つた露軍の奇跡は、

勇士イワノウイツチの五つの勲功である。

その頃の、ルスコエロー紙は、彼についてこんな記事を掲げていた。「陸軍士官候補生イワノウイツチは、人間として現しうる極度の勇気を發揮した。彼は五回、斥候としてあらゆる危険を冒し、露軍の重砲が敵手に陥るを防ぎ、五人の負傷せる戦友を援け歸った。彼はいかなる場合にも死を顧慮せず、否、ほとんど死に向つてとっかん 喊せんとするがごとき行動を現すことしばしばかりき。しかも、彼は、なんらの微傷だに負わず、今もなお勇敢に戦いつつあるが、陸軍当局は、彼に対して、サン・ジョルジエ十字勲章を与うべく進達したる由なり」とあつた。

この新聞の記事は、まだ、彼の勇戦を十分には尽くさなかつた。

彼は率先してすべての危険を引き受けた。味方の斥候隊が敵と味方との陣地の中央に倒れた時、彼は必ず、収容のために、身を挺して赴いた。おもむことに彼がラウカの戦線で味方の負傷兵と重砲とを救った語は、ほとんど全軍に知れた話である。

が、彼はいくら奮戦しても、微傷さえも負わなかった。彼は自殺の短銃を独軍の砲弾にするつもりであった。が、その砲弾は、はなはだ頼りのない凶器であった。彼は、自ら死を追った。が、死は容易に彼の要求を、許さなかつたのである。

そのうちに、彼の死場所が、とうとう得られたと思つた。独軍に圧迫された露軍は、ヴィスワの戦線を追われ、湾曲した線をしなから、だんだん露国の内地に退却して行つた。コヴノの要塞

にもう二十マイルという地点に接近した時であった。彼の大隊は、ライ麦の黄色く実った丘の上に、夜営を張った。その丘の六百メートルばかり右にも檜ひのきのまばらに生えているもう一つの丘があった。そこには、同じ五十五師団の野砲隊が、野営をしていた。翌朝、広い平原の上に夜が明けると、白い霧がいつぱいに、土地を圧していた。彼の隊へは早朝に来るはずの退却命令がどうしても来なかった。大隊長はやや焦り気味で、伝令を続けざまに、後方の師団司令部にやった。

すると、後方の、針葉樹の林に登った太陽が、濃い霧を透すかし始めると、左の丘には、やはり砲軍の姿がほのかに見えていた。隊長は安心した。味方の砲兵もまだ退却していないと思つたが、安

心はすぐ裏切られた。その砲軍の一つが、不意に紅の舌を出したかと見る間に、朝の静かな天地を砲声が殷々いんいんとどよもして、五六発の榴弾が、不意に味方の頭上に破裂したのである。味方の砲兵隊は、いつの間にか退却して独軍のそれが入れ替わっていたのであった。

大隊長はしばらく、失望にとらわれていた。が、この場合、退却するということは、すべての人間を敵の砲火の犠牲にすることであった。彼は直ちに、部下の大隊に戦闘隊形をとらした。イワノウィツチは、今こそ、死ぬべき時だと思った。味方は、ライ麦の畑を踏み荒しながら、散開した。がそれと同時に唸りながら飛んできた榴弾が、彼らの頭上に続けざま十二、三回破裂して、彼

らの三分の一を奪つてしまった。

大隊に付属している三門の機関銃が、敵に対して、弱い、しかしながら緊張した反抗を始めたのであった。

が、十門に近い敵の野砲は、やすやすとそのおうさつ鏖殺事業をやつている。六百メートルという近距離の射程では、地面を這う昆虫をさえ逃さなかつた。

榴弾が破裂するごとに、二、三十人の兵卒を砕いた。一町にも足りない散兵線は、十分と立たぬ間にまばらになった。大隊長が、まず倒れた。三人の中隊長のうち、一人は戦死し、二人は傷つた。

イワノウイツチは、いちばん左翼にいて、機関銃隊を指揮して

いた。敵の砲弾は一渡り戦列を荒すと、機関銃隊を最後の目標とした。操縦者がみるみるうちに倒れた。イワノウイツチは、敢然として、自ら機関銃の操射に当たったのである。

彼は、今日こそ自分の生命をいちばん高価に売ろうと考えた。

彼は自分で銃弾を運び、自分で装填<sup>そうてん</sup>し、自分で狙った。見ると、味方の戦線からは銃声がほとんど絶えてしまった。ただ自分が操っている機関銃のみが反抗の悲鳴を続けているのであった。砲弾が、続けざまに彼の身边で破裂した。

が、彼はもう気が上った人間のように、機関銃の引金を夢中で引いていた。この時には上官を殺した悔恨も、国家に対する忠節も、なんにもなかった。ただ、熱狂せる戦いがあった。ただ狂猛

なる発作があつた。敵の砲弾がしばらく途絶えたかと思うと、激しい空気が彼を襲つたと思う間もなく、大音響と共に、彼は大地に投げつけられて昏倒したのである。

が、その時、味方の危急を知つて駆けつけた露軍の野砲隊が応戦の砲火を開いた。左の腕を切断され、右の大<sup>ふともも</sup>腿を砕かれ、死人のごとく横たわっているイワノウイツチの上で、露独の烈しい砲火が交<sup>か</sup>わされたのであつた。

## 六

野戦病院の寝台の上で蘇生をしたイワノウイツチは、激しい熱

病から覚めた人間のように、清せい霊れいな、静かな心持を持っていた。

彼には、なんらの悔恨もなかった。なんらの興奮もなかった。

彼が歓楽の瞬間も、罪悪の瞬間も、戦線で奮闘した瞬間も、すべてがなんの感情も伴わずに、単なる事実として思い出された。もうすべてが、今からいかんともしがたい、前世の出来事のように思い出された。彼は、そのすべてが許され、そのすべてが是認されたようなのびのびした心持であった。煉獄を通ってきた後の朗かな心持であった。

時々、人を殺したということが、彼の心を翳かげらそうとすることがあった。が、そんな時、彼は幾十万の人間が豚のごとく殺される時、そのうちの一人や二人が何かほかの動機から殺されても、

何もそう大したことではないように思われた。恐らく、目の前であまり多くの人が殺し殺されるのを見たので、人殺しに対するイワノウイツチの感覚は、鈍ったのかも知れない。しかも彼自身、機関銃を操って、他の多くの人間を殺していたのである。

×

快い朝である。

新しい軍服を着たイワノウイツチは、いま揚々として病院の廊下を歩いている。すべてが巧くいった。彼は、こうした満足らしい心持しか心になかった。

「やっぱり、ダシコウが、俺に勲章をくれたことになる」彼はまたこう繰り返した。そして、彼はその皮肉を苦笑した。が、そん

な回想は、今日、ニコライ太公からサン・ジヨルジエ勲章を貰う  
 喜びよろこを少しでも傷つけるものではない。

彼は病院の廊下を揚々と闊歩している。籠の駒鳥はまた高らかに二、三度鳴き続けた。

# 青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：らびす

1999年5月18日公開

2005年10月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 勲章を貰う話

菊池寛

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>